



明治40年の小学校令の改正により、小学校は4年制から6年制になった。

あの日、五無齋が受け取った天来揮毫による「質実剛健」の扁額は、小学校令改正の2年後（明治42年）に開校した横鳥尋常小学校（前身は、五無齋の母校、山部誠倫学校）の校長室に掲額された。

その後、小学校令の全面改定や学校教育法の施行、芦田・横鳥・三都和3村の合併、町制の施行によって、横鳥尋常小学校が、横鳥国民学校から横鳥小学校、立科村立立科西小学校、立科町立立科西小学校に変わった。しかし、校舎の改築期間を除き、この「質実剛健」の扁額は、一貫して同じ校地に建つ校舎の校長室に掲額されていた。

この扁額は、校長室の窓から、戦争、軍国主義教育、言論・教育の統制、食料・生活物資の不足、敗戦、さらに、民主的で平和な文化国家としての再建など、日本の激動の時代を目撃した……。

昭和52年、立科東小学校、立科南小学校、立科西小学校の3校が統合した立科小学校の新体育館に、竣工式後、この扁額が移され、今も日々立科っ子の健やかな成長を見守っている。

五無齋が天来に求め、天来が五無齋に応えた、この「質実剛健」の扁額は、北佐久郡川西が輩出した俊傑二人の魂と魂の交わりの象徴であり、そして、「立科教育」の指針である。

5月から4ヶ月にわたって、老生の夢物語にお付き合いをいただき、まことにありがとうございました。

感謝を申し上げつつ今もお、なぜ、どのような経緯で、天来先生の「書」が立科小学校体育館に掲額されたのだろうか、という興味を抱いています。

もしかしたら、両雄の交わりはなく、天来先生の書道講習会に参加した篤志の方が、その場で所望した作品を寄贈されたのかも知れませんが、村（町）当局が買ったのかも知れません。

しかし、いずれの掲額経緯であったとしても、比田井天来先生揮毫という事実があり、必ずや、掲額のために尽力された方がおり、その方の思いがあり、そして、この扁額から薫陶を受けた方が数多くおられると思いますので、あらためて、立科小学校体育館の「扁額」について、ご存知の方がいらっしゃいましたら、ご教授いただきたくお願い申し上げます。

五無齋先生と天来先生の交わりを空想夢想しながら、今更のように五無齋・保科百助先生の凄さを実感致しました。

その第一は、五無齋先生の先見の眼力です。大日本帝国憲法（明治憲法）及び教育勅語の時代に、先生が提言したことと多くが、今日の学校教育でも生きていると同時に、課題として残されています。が、蓼科高校の大扁額「蓼科学校」にも、先生の卓越した先見性がさりげなく宿っているのを感じたのです。

いつぞや、この「蓼科学校」は学校名である、という説を拝聴したことがあり、ずうっと、五無齋先生が校長を務めた蓼科農学校（蓼科組合実業補習学校）の短縮と考えていました。そして、この書き方ならば、当時の学校令の目まぐるしい改定及び校名変更にも十分対応できると感心していたのですが、あるときふと、「蓼科学校」は「立科教育」と同義ではないか、という思いに至ったのです。

夢物語の続きのようで恐縮ですが、この「蓼科学校」には、校名の変更にも対応できる配慮と、五無齋先生の、「地域の保育園、小学校、中学校、高等学校が一貫した教育方針で、保育園及び学校、家庭、児童館、専門機関、行政、地域の方が連携して児童・生徒を育むべし。」という教えが込められていると考え、五無齋先生の凄さを再認識した次第です。

北佐久郡の川西地方が生んだ二人の俊傑の石碑が、津金寺と佐久市協和の天来自然公園に建っています。

五無齋先生の仙台石の巨碑は、木々の間から洩れる朝の陽光を浴びて、白金のように輝いています。片や、天来先生のように輝いています。片や、天来先生の書作品を刻んだ石碑は、小高い山の西側の中腹に建ち、茜の夕陽に金色に染まっています。

この双碑を前にしますと、二基の碑面が、中山道を隔てて向き合い、両雄が何やら愉快そうに語り合っているような夢の世界に誘われ、中山道の空高く、県歌「信濃の国」の結びの歌詞がメロディに乗ってゆったりと、軽やかにたゆたっているような気がします。

♪ 古来 山河の秀でたる

♪ 国は 偉人のある習い

♪ ♪ ♪